

東京大学大学院 人文社会系研究科
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣帰国報告
ソウル大学校国際夏季講座

様式1 (研修の概要)

提出日：2010.8.31

文化資源学研究専攻 修士1年 鈴木恵可
派遣形態：推奨プログラム

1) 研修プログラムの基本情報

派遣先：韓国・ソウル

教育機関名：ソウル大学校

プログラム名称：International Summer Institute (国際夏季講座)

2) 派遣期間

出発日：2010年6月26日(土)～帰国日：2010年7月31日(土)

総日数：36日間

3) 研修スケジュール

6/26	ドミトリーチェックイン
6/27	オリエンテーション(始業式)、韓国語授業プレイスメントテスト
6/28	授業開始
	・ History and Culture of Modern Korea 月・水・金 14:00-17:00 「近代韓国の歴史と文化」
	・ Korean Language(Advanced Class) 火・木 10:00-13:00 「韓国語」
7/3	ソウル市内ツアー(景福宮、仁寺洞)
7/17-18	フィールド・トリップ(全州：1泊2日)
7/31	修了式、パーティー

東京大学大学院 人文社会系研究科
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣帰国報告
ソウル大学校国際夏季講座

様式 2-1 (自己評価日本語版)

提出日：2010.8.31

文化資源学研究専攻 修士1年 鈴木恵可
派遣形態：推奨プログラム

1) 当初の計画の概要

修士論文のテーマを「日本近代彫刻と東アジア—植民地期の台湾・韓国における受容と発展」と設定し、ソウル大学図書館等の利用やソウル市内の美術館・博物館の見学を通じて、日本での研究が少ない韓国近代美術史（とくに近代彫刻史）に関する資料収集をはかる。また、ソウル大学夏期講座の「近代韓国の歴史と文化」（英語講義）と韓国語の語学授業を受講することによって、韓国近現代史の基礎的な知識の習得と、韓国語の語学能力の向上を目指す。

2) 実際に達成された成果

夏期講座受講生は受講カードでソウル大学図書館に自由に出入りでき（貸出は不可）、図書館内の設備を使用できた。韓国の論文、雑誌等はほとんどオンライン上でPDFファイル化されており、大学図書館内のPCから閲覧、ダウンロードすることが可能なため、資料収集も非常にスムーズに行えた。また、個人的に美術館関係者の方と面談し、博物館や美術館、アートスペースなどの見学を積極的に行うことで、韓国美術に対する造詣を深めることができた。

授業はすべて英語のため、今までほとんど経験のなかった英語でのコミュニケーション能力やアカデミック・スキルを向上させる機会を得ることができた。日本ではあまりない韓国近現代史の授業も、基本事項をおさえ、諸問題に興味を抱かせるもので、満足のいく内容だった。また、日本で中級程度までの韓国語を習得していた自分にとって、韓国語語学クラスの授業はレベルや内容がちょうど適していた。夏期講座には韓国人学生や韓国語を習う海外学生も多数参加しており、一定程度の韓国語が使えたことで、彼らとより親しくなるきっかけにもなり、自身の韓国語運用能力を高めるよい機会になった。

3) 感想

自身の研究にも人生にとっても、大きな刺激を受けた5週間でした。

これまで私が主に勉強してきたのは、日本近代史ならびに植民地期の台湾美術史で、韓国史や韓国語はとくに専門ではありません。しかし、独学で3年ほど韓国語を勉強し、韓国に何度も旅行に行っていたこと、以前台湾への留学中に韓国人留学生と多く知り合ったことなどから韓国に対し興味を持つようになり、この1、2年のあいだ、研究でも韓国語を生かせないか、韓国に滞在する機会がないか、という想いを温めていました。そのため、大学院進学後すぐに本プログラムの募集が回って来たさいは、とてもよいチャンスだと思い、派遣生に応募しました。

ソウル大学の夏期講座はすべて英語で行われ、韓国語の語学の授業は選択科目でしかありません。韓国に行ってみたいという意欲で応募したものの、英語の授業についていけるかが出発前からの心配事でした。日本やアジア関係の勉強をする学生は、往々にして英語に苦手感を持っていることが多いようです。私の場合も、大学受験では文系にも関わらず英語があまり得意でなく、学部時代には語学が苦手だからという理由で日本史を専攻に選んだ経験があります。その後も、東アジア関係の研究を始めたため、ますます英語の勉強からは遠ざかったまま、大学院に進学しました。

現地で実際に受講した感想としては、思ったとおり英語に苦勞しました。7人の受講生（他の国籍は、米国／コリアン・アメリカン2人、スウェーデン1人、中国1人、韓国2人）のうち、私が一番英語が出来なかったからです。ただ、授業内容の韓国近代史に興味があり、基礎知識があったこと、少人数で先生もよく目配りして下さったことから、自分なりにクラスを楽しむことができ、英語でのプレゼンテーションや筆記試験にも臨むことが出来ました。

この経験から感じたことは、日本史やアジア研究など、一見英語が必要ではなく、英語は苦手だからもういや…と遠ざけている文系学生でも、一度は英語圏に出てみるべきだということです。そうすれば、日本内で自足しているだけでは不十分な現状が分かると思います。担当教授のお二人は、韓国近現代史の専門ですが、どちらもアメリカで博士号を取得されています。また、授業の参考図書、プレゼンテーションの資料もほぼ全て英語文献を指定されました。現在は人文系の研究も日本やアジア内にとどまらず、世界で、とくに英語圏で大量に生み出されているのです。このことは、ソウルに行く前には考えつきもしなかったのですが、今回のプログラムに参加して非常に大きな印象を受けた部分でした。今後自分が研究を進めていくにあたって以前より、より大きな視野を手に入れたように思われます。

もちろん研究に関するだけでなく、プログラムなかでは、学校そのほかで出会った人々から、もっとも多くの楽しさをもたらしたように思います。今回は5週間という短い期間だったため、あらかじめ日本から韓国の知人に連絡したり紹介を頼んだりして、できるだけ多くの人と出会えるように準備しました。派遣期間が短い場合、現地の生活や言語環

境に慣れている時間がないので、日本である程度準備をしていき、現地では短期の目標に集中するのがよいと思います。さいわい、同じ派遣生だった友人も韓国に知人が多かったことから、現地でさらに紹介を受けることもでき、ほとんどの日に約束を入れるくらい充実した時間となりました。

また、夏期講座の参加学生も、韓国をはじめアメリカやヨーロッパ、シンガポールなど多岐に渡っており、ほとんどが学部生で、みなソウルでの夏休みを楽しんでいる様子でした。私は少し年のいった院生で、彼らより少々お姉さんだったのですが、仲間に入れてもらうことができ、私自身年下の世代から大きな刺激を受けることができました。20代初めで、英語か現地語でのコミュニケーションがある程度とれるのなら（もしくは少々不安があっても）、一度このような機会でも海外に出てみることは、非常に大きな意味があるでしょう。そのことを実感した今回のプログラムでした。